

丹術にも言及する。さらに製紙技術。十五世紀ごろから木灰の代りに蠣灰を用いたのは注意されてよい。しかし紙すきの技法は日本や中國と變らない。火藥原料の硝石採取法は、世界の各地ときほど變るところはないが、人工的に硝土を培養する方法は行われなかったようである。

韓國の古代ガラスは、人面を作りだしたガラス玉が最近發見されるなど、そのガラス文化は日本や中國ともちがう獨自の性格をもっていることが、明らかに becoming 注目されつつある現狀である。

しかもそれは中國とは異つたレベルでの、オリエント・ガラスの影響がみられるという點で特に興味をひく。この點は今後の究明の待たれるところである。

第五章は地理學と地圖。ここでは韓國の自然學として特徴的な風水説が紹介されている。これは人間と自然の關係を獨特の形で表現した思考として、重要なものである。これについてはもっと詳しい論が望まれるところであらう。そして以下地圖、地誌の重要なものについて解説され、イスラム、西歐の影響も併せて考慮されている。

以上、全相運氏の力作の内容を概観しつつ、その二、三についての批評、あるいは今後への期待を記してきた。かつての洪氏の著、そして今は全氏の著、韓國の科學技術は、ここにふたつの通史を得たのである。そしてわたしにとって多くの未知の史料が展開され提示されてゆくのは、ちかごろ少ない新鮮な世界であつた。

だが通史を書くことは、まことに困難な作業である。評者も青年のころ「日本科學史」を書いた。多くの史料と過去の研究史を、かなり強引にまとめてしまうことは、青年時のひとつの氣負いであつ

たのかもしれない。それにくらべると、全氏のこれは、史料は韓國から中國、日本に及ばねばならぬだけでもひろい視野を必要とする。それを全氏はよくまとめられた。しかも韓國―朝鮮の文化の創造性と獨自性を主張するにも、その態度は淡々としてナシヨナリスチックな匂いを感じさせない。そしてこの全氏の勞作をスタートとして、韓國文化と日本、また中國、さては北方ユーラシア、オリエントと、科學と技術にわたる相互の交流の歴史が拓かれてゆくことこそ、評者の期待したいところである。(吉田光邦)

The Agqyunlu :

Clan, Confederation, Empire

(白羊朝 氏族・部族連合、帝國)

J. E. Woods, Chicago, The University
of Chicago Press, 1976

一四〇五年、ティムールが中國遠征の途上オトルルで没してから十六世紀の初頭、シャー・イスマーイールがイランの地にサファヴィー朝を建設するまでの一世紀―すなわち十五世紀―は、イラン史上でこれまで「混沌の時代」(E. G. Browne)、「空白の時代」(E. Ashtor) などと呼ばれてきた。これは、勿論この時代イランを中心とする東方イスラム世界が政治的に極度に混亂、分裂した状態にあつたための呼稱である。と同時に、これはこの時代の難解な史料、複雑な政治史に業を煮やした東洋學者たちの皮肉を込めた命名でもあつた。

しかし、實はこの「十五世紀」をどのような時代として理解するか、ということは、イラン史上の、ひいては西アジア史上の大問題なのである。ここで「十五世紀」に關する二つの對立する見方を紹介し、その正しい理解がいかに必要であるかを述べてみよう。

從來この時代に先立つ十一〜十四世紀は、セルジューク朝、イルハン國、ティムール朝といった所謂「征服王朝」の時代であるとされ、この時代に續く十六世紀は、東方イスラム世界における「民族王朝」（トルコのオスマン朝、イランのサファヴィー朝、中央アジアのシャイバニー朝など）の成立期であると言われる。とすると、この間の十五世紀は「征服王朝」から「民族王朝」への過渡期にあたることになり、當然社會的になんらかの大きな變化があったことが豫想される。この意味では十五世紀は「變化の世紀」と見なすことが出来る。

私はこの從來の考え方に對しては否定的な見解を持っている。というのは、既に述べたように（拙稿「サファヴィー朝の成立」『東洋史研究』三七—二 一九七八 参照）少なくともサファヴィー朝においてはその成立當初トルコ・モンゴルの—すなわち遊牧民的—傳統が根強く存在し、これは明らかに「征服王朝」時代から一連のものとして捉えられるからである。すなわち、私は征服王朝時代から少なくともサファヴィー朝初期に至るまでの期間はイラン社會の基本的な枠組み—遊牧民對都市民・農民—は變化しなかった、と考えるのである。この立場に立つと「十五世紀」は、トルコ・モンゴルの傳統が繼承され、定着して行つた時代、言わば「繼續の世紀」として捉えられよう。

このように「十五世紀」をどのように理解するかによつてイラン

史の流れは随分變つたものとなつてくる。この時代の解明が必要な所以である。そのためには、まず何より當時の事實を實證的に明らかにして行かねばならない。具體的な例證なしにイメージ論を展開していても無駄だからである。

さて、この十五世紀にイランの地で興亡した最も重要な政治勢力の一つにアククンル Aqquyunlu—白羊朝—がある。ここでこれから取り上げようとする The AQQUYUNLU Clan, Confederation, Empire はこの白羊朝の政治史を極めて詳細に實證的な手法で研究した勞作で、正に今述べた要請に答えるべく現われた書と言える。私はイスタンブールの書店で本書を偶々見つけ、内容を拾ひ讀みして狂喜したものである。

本書は一應王朝史と銘打つてあるが、その種の書にありがちな細かい事實をただ並べただけのものでは決してない。さすがに著者、J. E. Woods 氏がプリンストン大學に提出した學位請求論文を基とするだけあつて、全三百數十頁を通じて著者の確固たる史觀が根底を流れており、讀んで非常に興味深い書である。以下本書の持つ膨大な量の價值の一部を紹介し、私の感想を述べることにするが、政治史の敘述を中心とした本書の性格上、内容をいちいちまとめて述べることは不可能に近い。次に目次を掲げておくので参照して戴きたい。

第一章 白羊朝史 主題と史料

序論

白羊朝社會政治構造の術語

白羊朝史研究のための資料

第二章 氏族から侯國へ

十四(八)世紀中葉までの Bayandur

第一次統一と第一次内戦

侯國の創建

Qara 'Uthman の功績

第三章 大内戦

'Ali の代理アミール位

Hamze の興隆

Jahangir の統治

Uzun Hasan の反亂

第四章 侯國から帝國へ

侯國の復興

大征服

白羊朝帝國の成立

Baskent の戦いの影響

第五章 停滯と衰退

第三次内戦

Ya'qub の獨立統治

連合部族間戦争

鼎立と Isma'ili Safawi の興隆

第六章 サファヴィー朝の繼承

著者は、冒頭で本書の目的として、信頼できる白羊朝政治史の確定を擧げているが、その言葉の通り、本書の大部分は白羊朝政治史上の諸事件の敘述にあてられている。このことは目次を一瞥しただけでも明らかであろう。本書の最大のメリットはこの歴史事實の

確定という基礎的作業を完成したところにある。嚴密な史料批判と綿密な考證に基づいて明らかにされた事實の数は限りなく、これまでおぼろ氣にしか分かっていなかった白羊朝政治史が、西アジア史の中にはっきりとした形で位置づけられて現われることとなった。

そしてその結果浮かび上って來た白羊朝の歴史は、バーヤンドル部族内部での主導権争い、黑羊朝との部族連合間戦争、そして政治的統一の後に起こる短期間の大征服、都市定着民との對立、宮廷におけるシャーマニズム的風習、と遊牧民の歴史に特有な現象に満ち満ちている。著者自身も、第一章で、白羊朝國家をトルコ系クルド系の約五十の遊牧部族から成る連合體と定義しており、このことの正しさは、本文中で述べられている多くの例證(例えば軍隊における左右翼制、十進法的軍事體系、近衛軍の存在、財産共有の觀念、さらに息子たちに「トルコの自由な君主」ととしての定着の危険性を説く Qara 'Uthman の姿など)からも確かめられる。白羊朝の社會は基本的に遊牧國家的體制を持っていたのである。

さらに著者は、序論の部分で十五世紀のイラン社會について觸れ、モンゴルをはじめとする中央アジア遊牧民勢力の流入の結果、被征服定住民と遊牧支配層の對立關係がその大枠をなしていたと言う。本稿の冒頭で、私は、サファヴィー朝初期の社會から類推して、十五世紀社會のこのような性格を想定したが、これはあくまでも事實の裏付けを持たない想像であった。著者の如き白羊朝期の研究者が實證的な研究を踏まえて同じ結論に達している點は注目に値しよう。壯大な歴史事實の集積とも言える本書を読んで、私は十五世紀を「繼續の時代」と見る自分の見方が大筋において決して誤っていないことを確信した。言うまでもなく、このことが私が本書を讀ん

で得た最大の收穫であった。

さて、以上は本書を通讀して得た全體的な感想であるが、厖大な政治史を敘述して行く過程で著者がしばしば提出している着想にも鋭いもの、面白いものが多くあった。特に魅力を感じた點を三つ紹介しておく。

著者は、本書の舞臺となる地域を「中央イスラム世界」と定義している。これは東はホラーサーン地方から西はアナトリア高原、北はコーカサスから南はメソポタミア地方に至る今日のアフガニスタン、イラン、トルコ、イラク、ソ連邦に跨がる境域のことで、ペルシア語史料の中に「Iran Zamin」（イランの地）という形で現われる地理的概念にはほぼ等しいものと思われる。これだけの地域を一つの視野に入れることで、これまでともすれば、「イラン史」「トルコ史」などという今日的な枠組によって制約され、どちらの範疇にも入らないために雙方からまますぎ扱われていた白羊朝史がはじめて主體的な立場を持ちうることとなった。あたり前のことだが、この時代、今日の領土的、民族的な意味でのイラン、トルコという區別はなかったのである。

また著者は、黒羊朝のジャハーン・シャー、白羊朝のウズン・ハサンが共に、シャー・ルフ、ひいてはティムールの後継者たらんことを望んでいたと述べる。同じ時代、中央アジアではなおチンギス・ハンの後裔であることが大きな意味を持ち、ティムール家の權威もこれには及ばなかったことを思うと、中央イスラム世界、すなわちイルハン國の舊領における兩者の地位、立場の逆轉現象は非常に興味深い。このことは、中央イスラム世界での「ハン」という稱號の示す地位、權力の相對的低下（前掲拙稿参照）とも關連して、

イランにおけるチンギス・ハン家の權威という問題を考える際の大きなポイントとなろう。

イランでシーア派が力を持つに至った理由についても著者は面白い見方をしている。正統的カリフ制度を破壊した異教徒のモンゴル人が、その後簡単にイスラムの正統派に改宗した。このため、彼らに對して強い反感を持っていた被征服民がスンニーを放棄したのではないかというのが著者の主張である。イラン人のシーア改宗の理由の一つとしては面白い。ただし注意せねばならないのは、イラン人の大部分がシーア派を受容するのは、モンゴル人によるイルハン國が滅びて二百年近くを経たサファヴィー朝の時代になってからだということである。

本書の有用性のうち、體裁的な側面についても二點取り上げておきたい。

まず、第一章で白羊朝史の研究に利用できる資料について懇切丁寧な解説がなされ、さらに巻末には詳細な文獻目録が附されていることである。この解説と文獻目録は著者の史料に關する深い造詣を示すもので、私の如き入門者から見るとただただ驚嘆の他はない。

用いられている資料は、ファルマーン、書簡、インシャー文學などイスタンブルやイラン各地に現存している文書類、碑銘、貨幣、圖像、それに、ペルシア語、アラビア語、さらにグルジア語、アルメニア語の年代記、地方史類と非常に多岐に亘っている。我々はこれによって白羊朝史のみならず、黒羊朝、ティムール朝、サファヴィー朝などの歴史資料についても多くの知識を得ることが出来る。西アジア史、特にイラン史の如く資料に關する情報之乏しい地域を研究する者にとってこのような形で資料紹介は誠に有難いことと言

わねばならない。

また、地圖、系圖、概念圖などの圖表が隨所に挿入されている點が有益である。本書のように地域、時代を限った専門的な研究書を讀む際、我々は馴染みのない人名、地名に悩まされがちだが、本書の場合、これら視覚的援助のおかげで隨分樂に内容が理解でき、しかも多くの新知識を吸収することが可能である。

このように私が本書から得た知識、思考のヒントは數限りないのであるが、著者の見解に對して疑問を感じた點がわずかながらあったことも事實である。そのうち重要だと思われる二點を呈示する。

まず、著者の時代區分、そしてそれぞれの時代の意味づけ、定義づけの問題である。著者は、ウズン・ハサンが黒羊朝のジャハーン・シャーを撃破した一四六七年を區切りとして白羊朝史全體を大きく二つに分け、前半を侯國時代、後半を帝國時代としている。そして侯國期を白羊朝部族連合が遊牧略奪集團から比較的中央集權化された領土國家へと政治、經濟、社會的に進化して行く過程と捉え、帝國期を部族連合體が土地、人民、商業的中心地を把握、支配して傳統的なイラン・イスラム的農業帝國へと移行しようとする過程と見なす(六―七頁)。

時代區分は一應首肯できる。しかし、「イラン・イスラム的農業帝國」とは一體何なのだろうか。しかもこれが「傳統的」だとすると、どの時代のどの政權がこれにあたるのだろうか。著者は他の部分で、ウズン・ハサンの建設した白羊朝帝國は、軍事を擔當する遊牧トルコマン部族と中央行政機構を牛耳るイラン人官僚の二本の柱の上に成立していたと述べている(一二〇頁)。この帝國の「二元性」はセルジューク朝以來、イルハン國、ティムール朝など遊牧民

を君主とする國家において常に見られる圖式である。著者はこれらの國家を「イラン・イスラム的農業帝國」と呼ばれるのだろうか。確かに遊牧民を君主とする國家も最終的には租稅收入を重要な財源とするようになる。しかしだからといってこれらの國家を農業帝國と呼ぶことには私は躊躇を覚える。他の箇所では用語の使用に人一倍意を用いている著者が犯した珍しい勇み足と言えよう。また、もし著者が、遊牧民が都市や農村を恒常的に支配したことをもって「農業帝國」と言うのであれば、これは程度の差こそあれ、白羊朝侯國の時代から存在した現象である。私は白羊朝國家の性格はこの王朝一代を通じて本質的には變化しなかったものと考えており、侯國と帝國の間の差異もとを迎ればその支配領域の廣さの違いに由來するのだろうと思つてゐる。

次に、白羊朝の後を繼いで中央イスラム世界の覇者となつたサファヴィー朝についての著者の見解を検討したい。周知の如く、サファヴィー朝の創始者、シャー・イスマーイールは白羊朝のウズン・ハサンの孫(彼の母がウズン・ハサンの娘)にあたる。このイスマーイールは王朝建設の過程で白羊朝の王子たちのほとんどすべてを冷酷に殺害している。從來これは自分の父祖を殺害した白羊朝王家に對する復讐と考えられていたのだが、著者はこのイスマーイールの行爲をそれ以前に白羊朝王家で世代交代のたびに行なわれてきた王朝的「除去」の法則―すなわち、自分の權力を確固たるものとするために王朝の他の成員を排除する―ではないかと言う。従つて、イスマーイールは白羊朝の王權はそのまま受け繼ぎ、その實質的な後繼者となつたと考える。

近頃、白羊朝とサファヴィー朝が近い關係にあり、後者は前者の

後繼者であるとの考え方が盛んになりつつあるが、ここまで大膽に兩者の關係を言い切ったのは著者がはじめてであろう。この兩王朝の連續性を強調するという意味では著者の説は魅力的なものではあるが、私は次の二つの理由からこれは少し言い過ぎではないかと思う。一つは、この兩王朝はいずれも遊牧部族連合體をその根幹としているが、この遊牧部族連合體を構成した部族を比較してみると、ほとんど大部分は異なっているということである。つまりサファヴィー朝部族連合體は白羊朝部族連合體をそのまま受け繼いだものでは決してなかったのである。もう一つは、白羊朝連合を構成していた部族のいくつかが、白羊朝の瓦解後、サファヴィー朝連合に組み込まれていることである。(例えば Mawasilū, Afshar など)これは著者自身が述べている黒羊朝から白羊朝への移行時のパターンとそっくり同じである。元來は別々に存在していた二つの部族連合體のうち一方が、抗争の結果、他方の一部をも組み込むことになったのである。従って、白羊朝からサファヴィー朝への移行とは、部族連合體という觀點に限って考えれば、黒羊朝から白羊朝への交代と本質的に何ら變わらなかつたものと思われる。白羊朝の王子たちを次々と殺害したこともこのように考えればさして不思議ではない。ウズン・ハサンが黒羊朝諸王子に對して行なつたのと同じことをイスマーイールも行なつただけのことである。わざわざ王朝的「除去」の法則と見る必要はないのである。

以上、本書の内容について感じたこと、氣附いたことのいくつかを書き綴ってきたが、本書が全體としては優れた劃期的な研究であることは疑いを容れない。本書の出現によって十五世紀という時代の持つ性格について一つの明確な解答が得られたのである。白羊朝

史の解明ということだけでなく、イラン通史を考える手掛りを与えたという點でも本書は高い評價を受けるべきである。今後本書が當該分野における基本的文獻として大いに利用されて行くことは確實であろう。もはや「混沌の時代」は去つたのである。

(羽田 正)

中國民族工業の展開

島 一郎 著

昭和五十三年六月 東京 ミネルヴァ書房 A5判 二三四頁

近年、中國現代史に關するますます多くの研究が、その研究對象時期を一九世紀から二〇世紀へと、そして、二〇世紀の一〇年代から二〇年代・三〇年代へと下降させてきている。とりわけ、日中戦争開始直前に至る一九二〇・三〇年代の中國社會・經濟の研究は、固有の重要な意義を有するであろう。それは、單に、日本においてかつて、同時代中國社會の研究として蓄積された成果が眞正面から受けとめ對決せられることなく散逸してしまふという危険を防ぎ、かなり長期にわたつた中國研究上の研究主題の空白を埋めるという一つの意義にだけとどまるものではない。すなわち、かつては獨自なタイプではあるとしても確かに「社會主義」であると考へられていた中國において、外見的にめまぐるしい政治上・經濟政策上の變化がみられる現在、中國社會を理解するためには、「社會主義」と